

平成 30 年度

病害虫発生予察情報 第5号

6月予報

北海道病害虫防除所 平成 30 年 5 月 29 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080 ・ Fax:0123(89)2082

季節予報(付記)によれば、6月の天気は数日の周期で変わり、気温は平年並または高い確率ともに40%、降水量は平年並の確率が40%と予報されています。

季節予報と病害虫の発生状況から多めの発生が予想される病害虫は、小麦の赤さび病、アブラムシ類、豆類のジャガイモヒゲナガアブラムシ、ばれいしょのアブラムシ類、りんごの黒星病、斑点落葉病、腐らん病です。

6月に注意すべき病害虫

作物名	病害虫名	発生予想		注意事項および防除対策
		発生期	発生量	
小麦	赤かび病	—	並	1回目の防除時期である開花始を見逃さず、降雨が予想される場合には前倒しでの防除を実施。発生菌種によって効果の高い薬剤が異なるため、薬剤の選択に注意する。
ばれいしょ	疫病	並	並	初発生期予測システム(F L A B S)を活用し、適切な初期防除を実施する。
あぶらな科 野菜	コナガ	既発 (やや早)	並	ジアミド系薬剤に対する抵抗性個体群の発生が確認されているので、防除にあたっては薬剤の選択に注意し、効果確認に努める。
りんご	黒星病	やや早	多	重点防除時期は開花前から落花10~20日後である。防除間隔が開きすぎないように注意。適切な散布水量で丁寧に散布する。チオファネートメチル剤では耐性菌の発生が確認されているので薬剤選択にも注意。
りんご	腐らん病	—	多	7月になると見づらくなるため、継続的な観察を行い、早めにより病枝の切り落としや削り取りを実施して園外で適切に処分。切り口には薬剤を塗布。

A. 水稻

ヒメトビウンカ 発生期：既発（並） 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 一般田における前年の発生量はやや多かったことから、越冬密度は平年よりやや高かったものと推測される。
- (2) 越冬した幼虫が活動を開始する4月の気温は平年より高く、5月の気温も高めに推移している。
- (3) 予察田の畦畔すくい取り調査における成虫初発期は、長沼町および比布町で平年並であった。北斗市では成虫の発生を認めていない。
- (4) 予察田の畦畔すくい取り調査における成幼虫捕獲数は、長沼町および比布町で平年より少なく、北斗市では平年並であった。
- (5) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 縞葉枯病の常発地域でヒメトビウンカに対して有効な殺虫剤の育苗箱施用を実施していない場合には、本田における水面施用あるいは茎葉散布のいずれかを行う。
- (2) 水面施用剤を使用する場合は、処理後4~5日間止め水にして薬剤の流出を防ぐ。農薬の流出防止のため、処理後7日間は落水、かけ流しをしない。

イネドロオウムシ **発生期：やや早** **発生量：少**

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 前年の発生量は平年より少なかったことから、越冬密度は低いと推測される。
- (2) 本種は年1回の発生で、越冬成虫が水田へ移動し、卵塊を葉の表面に産み付ける。低温が続くと産卵期間が長引き、産卵量も増加する。
- (3) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期は平年よりやや早く、発生量は平年より少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除は卵塊密度が株あたり2卵塊以上の場合に実施する。調査時期は卵塊数がピークとなる日を中心とした約10日間である。
- (2) 老齢幼虫に対しては薬剤の防除効果が劣るので、若齢期に防除を実施する。
- (3) 薬剤散布は防除ガイドに準拠して実施する。各種薬剤に対する抵抗性個体群が認められているため、前年度までの防除効果を参考に薬剤を選択する。

イネドロオウムシに対する薬剤の選択に注意しましょう！

水稻のイネドロオウムシでは、有機リン系およびカーバメート系剤に抵抗性の個体群の発生が道内の広い範囲で認められています。さらに近年、主要な育苗箱施用剤の一つであるフィプロニル剤に対する薬剤抵抗性個体群が一部地域で確認され、ネオニコチノイド系薬剤のイミダクロプリド剤でも薬剤抵抗性個体群が確認されました。

育苗箱施用剤を使用している場合も、ほ場を観察して効果の確認につとめましょう。また、茎葉散布などの移植後の薬剤防除にあたっては防除ガイドに準拠し、以下の点に注意しましょう。

1. 薬剤の育苗箱施用を実施していても被害が進む場合は、別系統の薬剤または別系統を含む混合剤を散布しましょう。
2. 散布薬剤の選択にあたっては前年までの防除効果も参考にし、以前より効果が低下したと思われる場合は、別系統の薬剤または別系統を含む混合剤に切り替えましょう。
3. 散布の際は登録にある希釈倍率を遵守しましょう。規定を下回る濃度で散布することは、当年の効果不足につながるだけでなく、薬剤抵抗性個体群の出現を助長する危険性があります。

フタオビコヤガ **発生期：やや早** **発生量：やや少**

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 前年の発生量は平年よりやや少なく、越冬蛹の密度は平年よりやや低いと推測される。
- (2) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生期は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 6月下旬に第1回幼虫による食害を調査し、被害株率が100%に達し、かつ被害葉率が44%を超えていなければ防除は不要である。

B. 小麦

赤さび病	発生期：既発（やや早）	発生量：やや多
------	-------------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 赤さび病は高温少雨で発病が助長される。特に気温の影響が大きく、高温で急激にまん延する。
- (2) 予察ほにおける「きたほなみ」の初発期は芽室町では平年より早く、長沼町および訓子府町では平年並だった。初発後の発生量は平年並に推移している。
- (3) 5月3半旬の巡回調査ではいずれの地点においても上位葉の発生を認めていない。
- (4) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 本病の被害許容水準は、開花始における止葉の病葉率 25%である。「きたほなみ」でも病気の進展を適宜観察し、下葉に本病の発生が多く見られる場合には止葉抽出期から穂ばらみ期の薬剤散布を実施する。
- (2) 開花期以降は赤かび病と同時の効率的な防除により対応可能である。

うどんこ病	発生期：既発（早）	発生量：並
-------	-----------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) うどんこ病は 20℃前後の気温でやや乾燥した気象条件の場合にまん延しやすい。また、曇雨天が続いたり、厚まきや窒素肥料の過用により小麦の生育が軟弱となると、本病の発生を助長する。
- (2) 予察ほの感受性品種「チホクコムギ」において、初発期は芽室町および訓子府町では平年より早く、長沼町では平年より遅かった。初発後の発生量は長沼町では平年より少なく、芽室町および訓子府町では平年より多く推移している。
- (3) 5月3半旬の巡回調査ではいずれの地点においても上位葉の発生を認めていない。
- (4) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 基幹品種「きたほなみ」のうどんこ病に対する抵抗性は“やや強”である。
- (6) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 減収しないための防除目標は、穂揃期から開花期の止葉病葉率を 50%以下にすることであり、小麦の生育と発生の状況を把握し、防除の要否を判断する。
- (2) DMI 系薬剤感受性低下菌が道内一部地域で確認されており、QoI 系薬剤耐性菌の発生も認められていることから、薬剤の選択に注意する。

赤かび病	発生量：並
------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 赤かび病は開花期頃がもっとも感染しやすく、出穂期から乳熟期に雨や霧などで多湿条件が続くと多発する。
- (2) 秋まき小麦並びに春まき小麦が開花期を迎える 6 月の降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤防除に当たっては、1 回目の防除時期である開花始を逃さないよう注意する。なお、開花始頃に降雨が予想され薬剤散布が困難と予想される場合は、開花前であっても前倒しで散布を行い、防除適期を逃がさないように注意する。
- (2) 秋まき小麦では赤かび病菌の一部が産生するカビ毒のデオキシニバレノール（DON）汚染低減を最優先し、DON 汚染低減効果の高い薬剤を開花始より 1 週間間隔で 2 回散布する。また、赤かび病菌の一種であるミクロドキウム・ニバーレ（以下ニバーレ）による赤かび病が問題となる地域では、2 回目にニバーレに対しても効果の高い薬剤を散布する。
- (3) さらにニバーレに対する防除効果を強化するためには、開花始から 3 日後にニバーレに対して効果の高い薬剤を散布するか、開花始に DON 汚染とニバーレの両方に防除効果が高い薬剤を選択する。
- (4) 春まき小麦では DON 汚染が最も問題となるため、DON 汚染低減効果の高い薬剤を開花始より 1 週間間隔で 3 回（抵抗性“やや弱”の「ハルユタカ」では 4 回）散布する。
- (5) 開花期間が長引く場合や、開花が揃わない場合には追加防除も検討する。

- (6) 薬剤によって、DON濃度低減効果やニバーレに対する効果が異なるので、防除対象とする菌種の重要度を踏まえ、防除ガイドを参考に薬剤を選択する。
- (7) ニバーレにおいては、クレソキシムメチル剤およびチオファネートメチル剤に対する耐性菌が広く出現しているので、これらの剤をニバーレに対する防除薬剤としては使用しない。

アブラムシ類	発生期：やや早	発生量：やや多
---------------	----------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (2) 以上のことから、発生期は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 出穂10日後頃に1穂あたり7～11頭程度のアブラムシが寄生する（寄生穂率が45%を超える）と減収するので、薬剤防除を実施する。

C. 豆類

ジャガイモヒゲナガアブラムシ（大豆・菜豆）	発生期：やや早	発生量：やや多
------------------------------	----------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 有翅虫の飛来量は、飛来開始が早いほど多くなる傾向がある。
- (2) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、有翅虫の飛来開始は平年よりやや早く、飛来量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 大豆のわい化病、菜豆の黄化病が多発する地域では、種子処理剤の使用に加え、防除ガイドに準拠して薬剤の茎葉散布を実施する。

D. ばれいしょ

疫病	発生期：並	発生量：並
-----------	--------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 疫病は平均気温が15℃程度の頃に初発期を迎えることが多いとされており、初発後平均気温が18℃から20℃で曇雨天がちになると急速にまん延する。
- (2) 6月の気温はやや高いものの、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生期、発生量ともに平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 初発生期予測システム（FLABS）による予察情報を活用して適切な初期防除に努める。さらに降雨によって防除適期を失しないよう気象情報にも注意し、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。
- (2) メタラキシル剤には全道で広く耐性菌が認められているので、薬剤の選択には注意する。
- (3) ダブルインターバル（14日間隔）散布を行う場合は、初発前から散布を開始し、薬剤は14日間隔散布での指導参考薬剤を用いる。

FLABSの計算結果は、6月上旬頃より

北海道病害虫防除所ホームページに掲載予定です

ばれいしょの主要産地・約25地点について随時更新します

「FLABS」または「疫病初発予測」で検索してください

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshoflabs/area.html>

アブラムシ類**発生期：やや早****発生量：やや多****1. 発生経過と予報の根拠**

- (1) 6月の気象予報から、ジャガイモヒゲナガアブラムシの発生期は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや多いと予想される（豆類の項参照）。

2. 防除対策

- (1) 原採種ほでは、土壌施用剤の効果が低下する時期から防除ガイドに準拠して薬剤の茎葉散布を実施する。

E. てんさい**ヨトウガ（第1回）****発生期：やや早****発生量：やや少****1. 発生経過と予報の根拠**

- (1) 一般ほにおける前年第2回の発生量は平年より少なかったことから、越冬蛹の密度は平年より低いと推測される。
- (2) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生期は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 被害株率が50%に達した時を目安に薬剤散布を実施すると、幼虫を効率的に防除でき、散布回数を1回にとどめることができる。
- (2) 産卵期にベンゾイル尿素系薬剤を使用することにより、高い防除効果が得られる。

F. たまねぎ**白斑葉枯病****発生期：並****発生量：並****1. 発生経過と予報の根拠**

- (1) 白斑葉枯病は、まとまった降雨があつてから7日以内の温暖な日に初発しやすく、特に平均気温18℃以上で発病する可能性が高い。また、高湿度や雨天が続くと多発しやすくなる。
- (2) 6月の気温はやや高いものの、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生期、発生量ともに平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 初発時期の防除が重要であるため、防除開始時期を失ないように、防除ガイドに準拠して効率的な薬剤散布を行う。

ネギアザミウマ**発生期：やや早****発生量：並****1. 発生経過と予報の根拠**

- (1) 雑草の根際などで越冬した成虫が6月上旬頃からほ場へ侵入し、幼虫は6月中下旬頃から発生する。高温少雨の気象条件が続くと多発しやすい。
- (2) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、効率的な薬剤散布を行う。茎葉散布は大多数の株の中心葉に軽微な食害が認められてから開始する。ただし、高温に経過したり降雨日が少なく乾燥条件が続くような場合には短期間で密度が上昇するので注意が必要である。
- (2) 近年、道内の広い範囲においてピレスロイド剤に対する抵抗性系統が確認されているため、以下に示す防除体系で対応する。
 - ① 1回目の散布には、効果の高い薬剤（プロチオホス乳剤、スピネトラム水和剤F（2,500倍）、フロメキン水和剤F）を使用する。
 - ② 同一系統薬剤を連用しない。
 - ③ 散布回数が多くなる場合は、効果の高い薬剤の多用を避けるため、被害抑制効果の期待できる薬剤（アセフェート水和剤、イミダクロプリド水和剤DF、スピネトラム水和剤F（5,000倍）、チオシクラム水和剤DF）も使用可能であるが、本種の密度が急激に上昇する条件下では使用を避ける。

G. あぶらな科野菜

モンシロチョウ	発生期：既発(並)	発生量：並
---------	-----------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 前年の発生量は平年並であったことから、越冬蛹の密度は平年並と推測される。
- (2) 予察ほのキャベツにおける産卵初発は、長沼町では平年並、北斗市では平年よりやや早かった。
- (3) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 成虫の飛来が目立ち産卵が多いほ場では、防除ガイドに準拠して薬剤の茎葉散布を実施する。
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生に注意し、効率的な防除に努める。

コナガ	発生期：既発(やや早)	発生量：並
-----	-------------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) フェロモントラップ調査による5月の成虫誘殺数は、長沼町で平年より少なく、北斗市で平年よりやや少なく、訓子府町では平年並、芽室町で平年よりやや多く、比布町で平年より多く推移している。
- (2) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 春まきキャベツにおいては、フェロモントラップ誘殺数が前日まで5日間合計で30頭を越え、かつ前日まで5日間の平均気温が15℃を越えた日が3日連続したら直ちに薬剤防除を開始する。
- (2) 育苗ハウス内における発生状況にも十分注意する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達した害虫であり、近年道内においてもジアミド系薬剤に対する抵抗性遺伝子の保持個体が確認されている。そのため、防除を行う際は以下の点に留意する。
 - ①セル苗灌注処理をおこなった場合は、ほ場での防除効果の確認に努める。
 - ②防除効果が低いと判断された場合は、早めに他系統薬剤による茎葉散布を実施する。
 - ③同一系統薬剤の連用は避ける。
- (4) 防除にあたっては、他害虫の発生に注意し、効率的な防除に努める。

ヨトウガ(第1回)	発生期：やや早	発生量：やや少
-----------	---------	---------

1. 発生経過と予報の根拠

※てんさいの項を参照。

2. 防除対策

- (1) 第1回の発生は6月中旬頃から始まる。老齢幼虫に対しては薬剤の防除効果が劣るので、若齢期に防除を実施する。
- (2) セル苗灌注処理または粒剤の植穴処理を行っていない場合は、茎葉散布を実施する。
- (3) 防除にあたっては、他害虫の発生に注意し、効率的な防除に努める。

H. りんご

黒星病	発生期：やや早	発生量：多
-----	---------	-------

<4月11日付け注意報第2号発表>

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 黒星病は開花直前から夏季にかけて平均気温15～20℃で多雨のときに多発する。
- (2) 本年のりんごの開花は平年よりやや早く始まっている。
- (3) 前年の本病発生量は平年より多かったことから、越冬した伝染源も多いと推測される。
- (4) 6月の気温はやや高く、降水量は平年並であると予報されている。
- (5) 以上のことから発生期は平年よりやや早く、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 重点防除時期は開花前から落花 10～20 日後であるので、適期を逃さず実施し、発生園では防除間隔を 10 日以上あけないよう注意する。
- (2) 重点防除時期後も引き続き防除を継続し、翌年の伝染源密度を高めないように留意する。
- (3) 防除機の切り返し地点など薬剤のかかりづらい場所や、散布水量が不足した場合に発生した事例が認められているため、十分な散布水量で丁寧に薬剤を散布する。
- (4) 耐性菌の出現を防ぐためローテーション散布を実施する。チオファネートメチル剤に対する耐性菌が確認されているので、薬剤の選択にあたっては注意する。

斑点落葉病	発生期：並	発生量：やや多
--------------	--------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 斑点落葉病は高温多湿条件で多発しやすい。
- (2) 6 月の気温はやや高く、降水量は平年並であると予報されている。
- (3) 以上のことから発生期は平年並、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除は落花 10 日後から予防的に薬剤散布を行う。

腐らん病	発生量：多
-------------	--------------

＜4 月 11 日付け注意報第 1 号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 腐らん病は凍寒害などによって樹体が損傷を受けると多発する。
- (2) 本年は、融雪が平年より早く、樹体の損傷は少ないと考えられるが、近年本病の発生量は多い傾向が続いており、病原菌の密度は高い状況であると推測される。
- (3) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 7 月になると病斑が見つらくなるので、なるべく早く被害部の削り取りを行い、薬剤を塗布する。
- (2) 病斑を除去してもその周辺から再発する可能性があるため、その後も観察を続け発生に注意する。
- (3) 切り落としたり病枝、削り取った樹皮を園外に持ち出し適正に処分する。

ハマキムシ類	発生期：既発（やや早）	発生量：並
---------------	--------------------	--------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園における卵越冬種の越冬量は、長沼町で平年より多かった。余市町では卵塊は確認されなかった。越冬卵のふ化開始時期は、長沼町では平年よりやや早かった。
- (2) 予察園における開花直前の被害花叢率は、長沼町で平年並であった。
- (3) 6 月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠し、薬剤散布を実施する。

ハダニ類	発生期：やや早	発生量：やや少
-------------	----------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園におけるリンゴハダニの越冬卵は、長沼町および余市町のいずれも認められなかった。
- (2) 本種は冷涼多雨年では発生が少なく、高温乾燥年での発生が多い。
- (3) 6 月の気温はやや高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生期はやや早く、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤抵抗性の発達が確認されているので、防除ガイドに準拠し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

付記

北海道地方 3か月予報 (6月から8月までの天候見通し)

平成30年5月25日
札幌管区气象台発表

<予想される向こう3か月の気候>

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

この期間の平均気温は、高い確率50%です。

6月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

7月 北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、平年と同様に曇りの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

8月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>

<<気温>>

[北海道地方]

3か月	20	30	50
6月	20	40	40
7月	20	40	40
8月	20	40	40

低い

平年並

高い

<<降水量>>

[北海道地方]

3か月	30	30	40
6月	30	40	30
7月	30	30	40
8月	30	40	30

少ない

平年並

多い

平成 30 年度

6月15日～8月31日は**農薬危害防止運動**実施期間です！

北海道では、農薬の使用に伴う事故・被害を防止するため、農薬を使用する機会が増える6月から8月を期間として、農薬の安全かつ適正な使用や保管管理等を推進する「**農薬危害防止運動**」を実施します。

北海道農政部生産振興局技術普及課
(TEL 011-231-4111 (内線)27-838)
北海道病害虫防除所
(TEL 0123-89-2080)
各総合振興局・振興局農務課



■ 農薬使用に関する注意事項

- 農薬は、農薬取締法に定められた事項が表示されたもの、または特定農薬に該当するものを選び、有効期限内に使い切れる量を購入する。
- 農薬のラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を読んで、十分理解し、表示された濃度や使用量等を守り、必要量以上に農薬を調製しない。
- 散布作業前日は、飲酒を控え、十分な睡眠をとる。体調が優れないときや著しく疲労しているときは、散布作業に従事しない。
- 農薬の使用前には、防除器具等を点検し、十分に洗浄がなされているか確認する。また、農薬の使用後には、防除器具の薬液タンク、ホース、噴頭、ノズル等農薬残留の可能性がある箇所に注意して、洗浄を十分に行う。
- 農薬を散布するときは、必要に応じ、あらかじめ周辺住民等に周知するとともに、看板等を立てるなど現場に近づかないよう配慮する。
特に無人ヘリで防除する場合は、学校や病院等の公共施設及び近隣の住民等に対し、実施予定日時、区域、薬剤等についての事前周知に努める。
- 農薬の飛散による危被害を防止するため、近隣の住民、飼育されている家畜及び蜜蜂、河川等の周辺環境への影響に注意する。
特に無人ヘリで薬剤散布する場合は、有機農産物が生産されているほ場等に農薬が飛散しないよう注意する。
- 農薬の調製及び散布作業中は、マスク、手袋、眼鏡等を着用し、体を防護する。
- 散布作業後は、よくうがいをし、手や顔などの露出部だけでなく入浴し全身を十分洗う。

★ 農薬情報の掲載サイト

農薬の登録情報や農薬取締法等については、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」(<http://www.maff.go.jp/nouyaku/>)をご覧ください。

